

第3回木曾川上流自然再生検討会 議事要旨

日 時：平成21年8月21日（金）13:30～16:00

場 所：グランパレホテル 4階 櫓の間

1. 開会

2. 挨拶（木曾川上流河川事務所 所長、座長）

3. 議事

(1) 規約の改訂について

- ・「木曾川上流自然再生検討会」規約の改訂について、了承された。

(2) 議事録の確認

- ・第2回検討会議事録について、確認・了解された。

(3) 第2回検討会からの意見と対応について

- ・流況の変化について、総流量が減少しているのは、降水量が減ったからなのか、それとも新規利水などの影響か。河川環境に対しては、平常時の流量の大小は環境に対して非常に大きな影響があり、今後の対応の仕方が変わるので、今渡・犬山など代表地点で、基礎情報として整理しておくこと。

(4) 木曾川上流自然再生計画の内容について

○自然再生計画の目標について

- ・「揖斐川特有の豊かな湧水・水際環境の保全・再生」について、河道内伏流水は、河川環境要素として非常に重要なものである。特に、河道の中に湧水が湧いて、それによってワンドが形成されるということは、この一帯の本来の扇状地の形であり、その様な箇所にはいろいろな生物が生息していると考えられる。
- ・目標をどの程度達成しなければならないのかと考えた場合、本川が非常に下がっているため、地下水位と水際の堆積状況を見たときに、揖斐川で湧水が戻ってくるのは難しいと考えられる。

○トンボ池等の湿地環境の再生、ワンド等の水際湿地の保全・再生について

- ・トンボ池を再生するためには、まず、トンボが安定的に生息できる水位を確保することである。かつてのトンボ池は水の流れがあり、たくさんのトンボがいたということを考えると、流れがある環境ができれば、種類も増え、かつて生息していたトンボも戻ってくるのではないかと考えられる。
- ・木曾川の平成19年の河床が、セグメントが変化する付近（40k 付近）から河床低下がかなり進んでいる。河床低下が将来的にどの程度で落ち着くかによって、トンボ池やワンドを考える際に非常に重要である。将来的な河床の動向について押さえておく必要がある。

○砂礫河原の再生について

- ・ 人と川との関わりというのは40年前、50年前と現在とでは違う。昔も人の関わりが無かった訳ではないので、その時の状態が本来の自然なのかどうかということを検討しておく必要がある。
- ・ 一番感じるのはダムができて大きな石が流れなくなって、砂が多くなったこと。岩の間に砂が入って魚が棲めなくなってきている。将来的に考えるなら、砂をどう除去するかということも1つの方法と考えられる。

○河川の連続性の確保について

- ・ 連続性の問題は非常に重要なので、慎重な検討をしていただきたい。特に水量（水深、流速）等を評価軸にして、効率的なモニタリング調査手法を構築することが必要である。また、連続性の目標設定を明確にすることが、より効率的なモニタリング調査手法の構築につながる。

○支川の緩流域環境の確保

- ・ 水質によって生息・生育する生物群はかなり違ってくる。流れを緩やかにしただけでもとに戻るというのではなく、水量や水質が影響していると考えられる。

○外来生物対策について

- ・ 魚類の減少の要因として外来生物の影響も大きいと考えられる。また、外来生物も河川環境要素の一つであることから、自然再生計画と外来生物対策の関係について整理することが必要である。

○整備の優先順位について

- ・ 整備メニューの中には、既の実施している項目もあるので、事業の無駄を生じさせないためにも、進捗状況に応じて自然再生計画を検討することが必要である。

(5) その他（地域での活動報告、今後の予定）

- ・ 地域活動報告として、木曾三川ふれあいセミナー・トンボ池環境調査などの開催状況について報告された。

4. 閉会